

戦争体験記

秋山 恭子（昭和4年生まれ）

昭和16年12月8日、私は小学校6年生でした。翌年は憧れの女学校、その頃は高校ではなく女学校といいました。入学して1年はまともに女学生時代を過せました。2年生の2学期からだったと思います。学校は学校工場になり、そのうちに本当の工場へ行くことになり、その工場は神奈川県ながわの戸塚とつかで、飛行機でんぱたんちきの電波探知機を作っていたそうです。制服学校の制服ですが、セーラー服ではなく、へちまえり衿の上着に下はもんぺで、リュックを背負い、中には非常食の大豆の煎ったものを入れて、防空頭巾ぼうくうずきんをかぶって行きました。私の家は埼玉県うらわの浦和でしたから戸塚までは2時間位、それ以上かかったかもしれません。途中で空襲警報くうしゅうけいほうになったのを知らずに工場まで行った事がありました。先生が「今、空襲警報ですよ。早く防空壕ぼうくうごうに入りなさい」と言われてびっくりし、恐ろしい思いをしました。

食べる物は、さつま芋いもやさつま芋の茎まで炒めて食べました。大豆の煎ったもの、お米なんか殆ど食べられませんでした。今、新潟県に住んで美味しいお米はそれぞれ惣菜そうざいがなくても食べられそうです。小麦粉も無く、ふすまとか、団栗どんぐりの粉とか、今では考えられません。何か買うにはすぐに行列です。一度並んでまた、もう一度並んだりもしました。今の子供達はしあわせだと思います。お菓子でも何でも沢山ありますよね。登校拒否なんてとんでもないと思います。私達は勉強したくても、出来ない、英語も敵国語ということで4年生で終戦になってからといってもまだ本などもなく、修学旅行も行けませんでした。

母は昭和29年の1月に亡くなりましたが、まだその頃何もなくて、ラジオもあまりよく聞こえない、機械に耳をくっつけて母は聞いていました。テレビが出来たときは一度テレビを見せたかったと思いました。

父と一緒に父の知っている農家、大宮の「ざい」の方まで、浦和から歩いて、それこそ1日ばかりで、さつま芋の買い出しに行きました。電車だのバスに乗ると取り締まりに引っ掛かるのです。リュックの下の方へお米をほんの少し入れてくれるのですが帰るまで心配です。見つかったらどうしようと思いました。

兄は大学を失敗したら軍属ぐんぞくに引っ張られ、北千島まで行かされて、2人並んでいた隣に立っていた人に「おい」と話しかけたら、その人はソ連の弾に当たって飛んでしまっていなかつたの事、まかり間違えば兄も亡くなっていたかもしれません。終戦になってもなかなか帰ってこられず、帰って来たら、新制大学になっていて何年も遅れてしまったので、体操の先生の資格をとりました。

父は「ほうかき炎」になっても麻酔薬ますいがないまま手術をし、すごく痛かったそうです。

庭に防空壕も掘りましたが、爆撃を受けたらあんなものでは助からなかったでしょう。寝るときも着の身着のままです。人間の生活ではなかったです。

あのB29の爆音は忘れられません。ブーンではなくゴォーという鋭いおなかに響くような音で

した。浦和の西の方へ焼夷弾しょういだんが落ちた時は夜だったので空が真赤になって、もの凄かったです。

終戦後もすぐには物はなく配給でした。衣料切符だとか。私は昭和 22 年にデパート、銀座の松坂屋へ勤めましたが、建物も爆撃にあったので、全階は使えず、売る物だってまだ余りありませんでした。何しろ東京は焼野原だったのですから・・・

そしてその頃私は、戦時中食べ物が無かったせいでしょう。肺結核はいけっかくに罹りました。幸いかるくてよかったのですが、薬もそんなに無くて、今、私は 77 才ですがよく生き延びたものだと思っています。